

47 【もやもや】

もやもやして、やりきれん。

どうしてそうなったのか、わかりません。

そういう季節だったのかもしれないし、そういう年齢だったのかもしれないし。

おつかいで、町に行ったときに、いままでみたこともない、とても可愛い女の子を、みかけたせいかもしれません。

学校でおしっこをしたときに、真っ赤な血のおしっこだったので、そのあとはなんともないのですが、その真っ赤な血が気になって、しかたないのかもしれない。

宿題の算数で、どうしてもとけない問題があって、そのあと先生にきいても、まったく理解できないで、いまでも頭のなかが、数字だらけになっているせいかもしれません。

完ちゃんにきいたら、

「そらあ、もやもやした焚火（たきび）の、けむりをすったせいじゃろう」

と、なかなか見事な回答をするのですが、どこがちがうかんじがします。

このときもやっぱり、懐爺をたよるほかはありませんでした。

「金ちゃんも人の子ですねえ」

懐爺はいやないかたをしました。

「わしを、おばけのこどもと、おもうてたんか」

「いえいえ、金ちゃんにも、ふつうの人間のところがあつたのか、という意味です。わたしは、金ちゃんは、ふつうの人間ではなく、おばけでもなく、特別な存在だと、選ばれてうまれてきたこどもだと、おもっていたものですからねえ。そのおもいはかわりませんが、それでもふつうの部分もあるのかと、感心も安心もしたのです。失礼しましたね」

「どう、えらばれたんじゃ」

その問いにはこたえずに、懐爺は解説をはじめました。

「それは人間の、こころのなかに棲みつく、【もやもや】というおばけで、【もんもん】ともいいます」

「【くりからもんもん】 かい」

「【くりからもんもん】は、別のおばけで、いま金ちゃんがとりつかれているのは、くりからぬきの、ただの【もんもん】」

「ただの【もんもん】、ただの【もやもや】かい。たいしたことはないのう」

「それが、ただの、は曲者（くせもの）なのです」

懐爺は、気の毒そうな顔をしました。

「くせものじゃ、であえ、であえ、かいのう」

「はい。その曲者のほうが、であってくれればいいんですが、なかなか外にでてくれません」

「こころのなかが、いごこち、いいのかのう」

「まったくその通りです。入られた人間は、きもちがわるいのですが、入った【もやもや】のほうは、きもちがよくて、なかなか外にでる気がおきない」

「やっかいじゃのう」

「じつにやっかいなおばけです」

「でてもらう、ほうほうは、ないのかのう」

ぼくは【もやもや】しながら、ききました。

「時間が経つのを待つしか。いやいや、ひとつだけ方法がありました。しかし、これは乱暴なやりかたですが」

「なんじゃい。もったいぶらんでええ」

「一発やるんです。からだのどこでもいいから、一発はげしくやるんです。【もやもや】はびっくりして、とびだします」

「なるほどのう。ならば、かいじい、いっぱつ、やってくれや」

「とんでもない。わたしには、大切な金ちゃんに、そんなことはできません」

「ならば、かんちゃんに、たのむかのう」

「完ちゃんだって、できないですよ」

「ならば、じぶんで、いっぱつ、やるしかないのう」

ということで、ぼくは帰りに、峠の崖のところに立つと、崖下めがけて、頭からとびこんだのです。

なんと、【もやもや】は、ぼくのこころのなかから、飛びだしてゆきま

した。

ぼくは、全治半年の大怪我を負いましたが。